4　蓬莱山　横山大観　一幅

昭和三年（一九二八）
絹本着色
本紙六六・〇×九五・六

作品番号3は、下村観山（一八七三～一九三〇）による〈巌に日之出図〉と横山大観（一八六八～一九五八）による〈月之出図〉の二幅を合わせて《蓬莱山之図》とし、明治三十三年（一九〇〇）の皇太子（大正天皇）御結婚を祝って、鷹司熙通、二条基弘より献上されたもの。大観と観山の二人は、同年に開催された第八回日本絵画協会・第三回日本美術院連合絵画共進会にも、やはり観山が太陽の昇る一幅を描き、大観が月の静かに輝く夜の情景を描いた対幅《蓬莱（日・月蓬莱山図）》（現・静岡県立美術館蔵）を出品している。この《蓬莱（日・月蓬莱山図）》では大観、観山いずれの絵にも鶴が描かれ、さらに大観は小さく亀も描き入れて、ここが蓬莱山であることを示唆している。しかし、本図においては観山は岸壁の間からのぼりゆく旭日を描くのみで、鶴の姿はない。大観は海辺に集う鶴を描くが、こちらは月の姿を明確に描かず、空の色調に一部変化をつけることで月の存在を暗示するのみである。図様を見ると、対の意識は薄まっており、それぞれが従来の蓬莱山図の定型にとらわれず、自由に仙境を表現している様子がうかがえる。

作品番号4の《蓬莱山》も大観による蓬莱山の図である。日本では富士の別称に蓬莱が用いられることもあり、霊峰富士には神仙の住む仙境蓬莱山のイメージが重ねられてきた。それを絵画化した例は明治二十七年の《青年画帖》（作品番号5）にすでに認められ、富士を数多く描いた大観もまた同様の趣向の絵を繰り返し描いたことが知られている。しかし本図はそうした蓬莱山と富士を重ねて描く作品とは異なり、山間に小さく楼閣がのぞき、鶴と鹿が愛らしく描き込まれた純粋な蓬莱山図である。青緑山水を意識した色使いと穏やかな形状の山容には、大観の思い描く理想郷の姿が見て取れる。昭和三年（一九二八）の大礼を祝して久邇宮邦彦王、同倪子妃より献上された。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

寿ぎの品々を読み解く
三の丸尚蔵館展覧会図録No.75

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十九年一月七日発行

© 2017, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan